

昆虫の世界

夏から秋へ ②

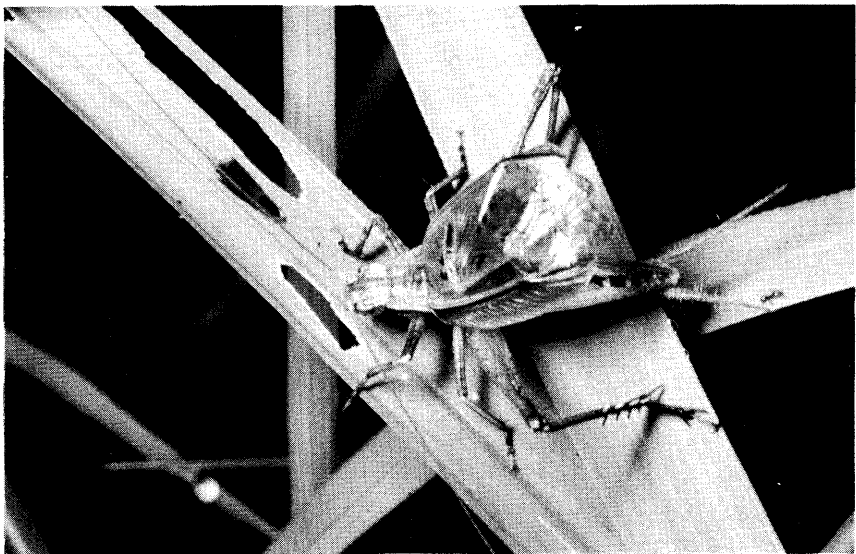
小島 賢司

夏を謳歌した虫たちの姿が少なくなり、夜になると涼しさを感じる頃になると、鳴く虫たちの声があちこちから聞こえてくるようになる。これら秋の鳴く虫たちは、昔から日本人に親しまれていたように、平安時代の歌にも詠まれている。

昨年の秋、昆虫館で「秋の鳴く虫展」を催し、期間中一日二回三十分程の内容で、「秋の鳴く虫のお話」を来館者を対象に行った。話を始める前に、知っている秋の鳴く虫の名前を聞いてみたが、子供たちの知っている虫は、スズムシ、コオロギ、マツムシ、ウマオイ、クツワムシがほとんどで、これ以上名前が出る時は、特に昆虫に興味のある子がいる場合か、展示してある写真や実物を見て答える場合が多かったようだ。これら五種類の鳴く虫は、童謡「虫の音」に出てくる名前で、歌と共に親しまれている様子がうかがえた。しかし、虫の名前は知っていても、実際にテープの鳴き声を聞き分けられる子供は少なかった。飼育されているスズムシは別とし

て、これらの虫の声が聞ける場所は年々少なくなっている。ある日、初老の女性が「カンタン」の鳴き声はどんなですか」と質問してきた。手持ちのテープを聞かせたが、「こんなものか」と言う顔をしていた。鳴く虫の中で一番美しい声とされているので、期待していたのだろうが、見事に裏切られてしまったようだ。そこでカンタンの声を聞くには背景が必要で、静かな山の上で聞くのが一番だと、一言付け加えておいた。私もいろいろな場所でカンタンの声を聞いたが、奥多摩で、静まりかえった湖面を眺めながら聞いたカンタンの声は、今も私の耳に残っている。

鳴く虫の仲間を分類するとコオロギ科とキリギリス科に分けることが出来る。コオロギ科は日本に約六十種、キリギリス科は五十種程が知られているが、すべてが秋に鳴くわけではない。コオロギ科の特徴として、体は平たくマツチ箱を横にしたような体をしている。鳴く時は二枚の羽を立てて鳴き、羽



▲羽を立てて鳴くマツムシ

は通常、右前羽が左前羽の上に重なっている。体色は例外はあるが黒っぽいものが多いようだ。これに對しキリギリス科と虫は、体が縦に長くマッチ箱を立てたような体をしている。鳴く時は、羽を立てずに鳴き、コオロギ科とは、羽の重なり方も逆になっている。体色は同じ種類でも緑色と褐色のものがある。

虫たちはなぜ鳴くのだろうか。その意味を考えてみよう。エンマコオロギの鳴き声を調べてみると、三通りの鳴き方がることが分かる。

第一は本鳴きといい、オスが自分の縄張りを主張する時や、メスを呼ぶ時の鳴き声で、「コロコロリ」と鳴き続ける。

第二は誘い鳴きといい、メスがすぐ近くまで来た時の鳴き方で「コロコロコロリ〜」と本鳴きよりやさしく聞こえ、まるで彼女に愛をささやいているように感じられる。

第三は争い鳴きといい、オス同士とケンカの時の

鳴き方で、顔をつき合わせて、「キリキリキリ」とお互いに鳴き合う様子は、人間のケンカにもよく似ている。

この三通りの鳴き方を観察するには、飼育容器に第一の場合はオス一匹、第二はオス一匹メス一匹、第三はオス二〜三匹を入れて観察すれば良い。こうして自分の耳で、鳴く虫のことば（？）がわかるようになる。鳴く虫の世界がおもしろくなってくる。

鳴くことは、彼らにとって必要不可欠なことであるが、その行為は常に危険と隣り合わせでもある。ある日、クツワムシの声を聞いていた時、近くで鳴いていたものが急に鳴きやんだ。懐中電灯で照らしてみると、オオカマキリに捕えられ食べられるところであった。鳴き声は外敵にも自分の居場所を知らせることになり、命がけの行為である。もっとも虫にとって一番危険なのは人間かも知れないが……。

鳴く虫は、夜行性のものが多く、暗闇の生活では、目よりも音や臭いの方が重要な意味を持っている。

る。その為、姿、形は非常によく似ているのに、別種の場合がよくある。決め手になるのは鳴き声で、童謡に出てくるウマオイにも二種類あり、「スーイッチョン、スーイッチョン」と鳴くハヤシノウマオイと「シッチョ、シッチョ」と短かくせわしないハタケノウマオイとがある。両種はうまく住み分けており、鳴く虫の夜間採集を行った時、雑木林の中でクツワムシといっしょに鳴いていたハヤシノウマオイの声を聞き、次のポイントの車で移動中に畑の中からハタケノウマオイの声が聞こえたので、あわて車を止め採集したことがある。実にびったり名前を付けたものだと思心してしまった。(もともと、ハタケノウマオイは草むらが主な生息場所ではあるが。)この両種を見比べてみたが、さっぱり区別が出来ず、図鑑の解説を見ながら、虫メガネでやっとその違いをみつけることが出来た。メスにとつては、鳴き声で相手をみつけるので自分の伴侶を間違えることはないであろう。

オカメコオロギでは、三種類が共によく似ているのでさらに難しくなる。鳴き声で仲間同士のコミュニケーションをはかり、秋の夜長を鳴き通した鳴く虫たちも、冬の気配が感じられる頃には卵を残して、皆死んでしまう。次の世代の卵は厳しい冬を耐え、秋にはまた、私たちにその鳴き声を聞かせてくれる。

今、昆虫たちの暮らせる林や草原は、どんどん少なくなっていく。人間の暮らしが豊かになることは良いが、子供たちの知る昆虫の世界が、図鑑の中だけのものにならないように。いつまでもカブトムシが雑木林の王様でいられ、歌に出てくる鳴く虫の声が聞かれる世の中であってくださることを願って、この稿の終わりとしてい。

(豊島園昆虫館)